

12016年12月4日川越教会

不思議な書き出し

加藤 享

[聖書]マタイ福音書1章1～17節

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。

バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾルを、アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、

ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。

[序] アブラハムの信仰

どんな本でも**書き出し**には、読者を引き付けて最後まで読ませる工夫がこらされています。それが新約聖書の場合、どうして長々とした**系図**という書き出しになったのでしょうか。

それはイスラエル民族にとっては、家の系図が非常に大切にされていたからでしょう。日本にもその風習が残っています。私たちの小学校時代、**日本史**の授業は、先ず**歴代天皇** 124代の**名前の暗唱**から始まりました。代々の天皇の治世がそのまま日本の歴史だと考えられていたからでした。

それにしても旧約聖書による人間の歴史は、**アダム**から始まっています。しかし新約聖書は、救い主イエス・キリストの歴史を、アダムよりずっと後の**アブ**

ラハムから始めました。どうしてでしょうか？

それは、**アブラハム**が文明の発祥地ユーフラテス地方の**豊かな都市生活**を捨て、75才にもなって神の命に従い、行き先も知らずに遠いカナン地方まで旅を続けて、遊牧生活を始めたからです。皆さん、考えてみてください。文化水準が高く、便利な都会暮らし、親族友人に囲まれて安楽な生活を送って来た**75才の老人**が、それらを**捨てて**、見ず知らずの辺鄙な異国に出立する——こんな**無謀な行動**を、私たちはとれるでしょうか。

「あなたは**生まれ故郷、父の家を離れて、わたしの示す地に行きなさい**。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める 祝福の源となるように」(創世記12:1)。いくら神がそうおっしゃっても、ためらう人が殆どではないでしょうか。神の**口約束**は、その時アブラハムだけが聞いた言葉でしかなかったのです。

でも、アブラハムは、**神の声に聴き従いました**。神は、ご自分の言葉を素直に信じて、聞き従った無欲なアブラハムの信仰を高く評価して、地上のすべての氏族の**祝福の源にする**との約束を、きちんと**果たして下さった**のでした。神は必ず、祝福を備えて、私たちを導いて下さって居られることを固く信じて、私たちも、神の御声に聞き従って生きて参りましょう。

[1] **ダビデの子**

ダビデはエッサイの8人目の末子です。遊牧生活で養われた信仰と才知を、預言者サムエルに認められて、初代イスラエル王サウルの後継者になりました。彼は、優れた統治力によってイスラエルを繁栄させ、**王の理想像**となりました。

しかしイスラエルの繁栄はダビデ、ソロモンを頂点として**分裂・衰退**し、遂には他国に征服されて、捕囚の憂き目を味わう**暗黒期**を迎えます。するとイスラエルが衰退していくその課程で、**ダビデの子孫からメシア(救い主)**が**与えられる**という**預言信仰**が生まれてきました。そして、この世界を本当に良い国にして、全ての人を幸せにして下さる王を、あのダビデの子孫から神は興して下さるに違いない、という**メシア待望の信仰**が、人々の間に広まっていきました。

事実、主イエスが道を歩いていると、二人の盲人が「**ダビデの子よ**、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来て、家の中にまで入って来ました。「わたしに出来ると信じるか」「はい、信じます」そこで二人の目に触り、お癒

しになりました。(マタイ 9 : 27～)

シドン地方でも、カナンの女が「主よ、**ダビデの子よ**、憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と必死に願い、癒して頂いています(15:21～)。エリコの町でも道端に座っている二人の盲人が「主よ、**ダビデの子よ**、憐れんでください」と叫んで、癒されました(20:29～)。また悪霊に取りつかれて、目が見えず、口のきけない人が癒されるのを見て、群衆が「この人は**ダビデの子**ではないだろうか」と驚いています(12:22～)。

そのダビデの子イエスが、ろばの子に乗って、エルサレムに入城された時、人々は、「**ダビデの子にホサナ**」と叫んで前を進み、また後ろに従ったのでした。しかしこのダビデの子は、権力者によって偽りの裁判にかけられ、十字架に磔けられて死んでしまわれました。

立派なエルサレムの城や神殿を建て、行政を整備し、財政を豊かにし、近隣諸国を従えて繁栄を誇ったダビデ王とは、また何と**異なるダビデの子イエス**でしょうか。でもマタイは、主イエスと生活を共にしたことによって、**このイエス・キリストこそ**、ダビデの子孫として、神が世界に与えて下さった救い主(メシア)、王の王なのだという信仰を、この系図によって伝えようとしたのではないのでしょうか。

[2] 4人の女性を加えた系図

ユダヤ人は男性中心の社会ですのに、この系図には主イエスの母マリアの他に4人の女性の名が記されています。**タマル**は自分の夫の父を誘惑して不義の子を産みました。**ラハブ**は宿場の遊女です。**ルツ**はモアブ人です。ユダヤ人は異国人を徹底的に嫌いました。**ウリヤの妻**は、夫のある身でダビデ王の子を身ごもりました。

普通に考えれば、仮にこのような人物が先祖の中に居たとしても、極力隠そうとするでしょう。しかも男の名だけで綴る系図に、こんな女性の名を**ことさら載せる**のは、自分の家の恥をわざわざ人の目にさらすものです。そうです。新約聖書の書き出しは、ユダヤの**代表的な家系**に見られる、**罪と恥**とにスポットを当てながら、二つにことを私たちに訴えています。

第一はどんな家にも、どんな人の生涯にも、罪があること。**第二**はその罪を救うために、**神は家族の仲間入り**をして下さったということです。そうです。こ

